

企業対抗ポッチャ大会の様子＝3日、千代田区



誰もが気軽に ポッチャ人気

2020年東京五輪・パラリンピックを前に、パラリンピックの正式競技で「地上のカーリング」ともいわれる「ポッチャ」の愛好者が増えている。障害の有無に関係なく誰もが気軽にプレーできるスポーツとして人気で、大学では公認サークルが発足し、企業対抗戦も開催。競技人口はリオ大会以降増加しており、関係者は今後も魅力を発信していきたいと考えた。

(久保まりな、写真も)

大学に公認サークル・企業が対抗戦

今年7月、文京区の東洋学園大に、大学公認のポッチャサークル「TOGAKU」が発足し、Uパラスポーツが発足した。

パラ前に愛好者増

脳性まひのため車いすを使用している人間科学部4年の木村駿汰さん(24)が「いろいろな障害者スポーツを体験してきたが、まずは誰もが楽しめるポッチャをやりたい」と立ち上げた。

所属ゼミの渋谷智久准教授の協力を得て、車いすの1年生3人と活動している。3人は、グローバルコミュニケーション学部市



限られたスペースで練習を重ねる東洋学園大ポッチャサークルのメンバー＝11月27日、文京区

川柳伸さん(19)、現代経営学部の春原祐弥さん(19)、人間科学部の橋本昂典さん(19)。週3回程度、授業後に実践形式の練習をしている。

11月中旬には初の公式戦に出場。結果は0勝3敗だったが、木村さんは「来年度以降はもっと上の大会に出られるように頑張りたい」と意気込む。メンバーは学内外でポッチャ体験会を開くなど普及活動にも取り組む、大会出場とともに今後継続していく方針。

一方、企業でもポッチャを楽しむ動きは広がっている。12月上旬、千代田区内の会議室で、東京商工会議所が主催する企業対抗ポッチャ大会が行われた。パラリンピックの機運醸成のため初めて開催され、予選を勝ち抜いた企業など24チームが参加。選手たちは「こを狙え」「いけるいける」などと熱い戦いを繰り広げた。

戦術に面白み

日本ポッチャ協会によると、競技登録者数は平成27年に200人だったのが、29年には介助者も含め365人に増えた。ポッチャの魅力について、東洋学園大の市川さんは「体を使うだけじゃなく、戦術も大切なところがある。最後の最後まで勝負は分らないんです」と説明する。

ポッチャは、ジャックボールと呼ばれる白い目標球に、いかにボールを近づけるかという競技だが、その目標球を投げるのは審判などではなく、選手。目標球をどこに投げるかによっても、勝敗が左右

ポッチャ 赤、青6球ずつのボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当たったり、いかにジャックボールと呼ばれる白い目標球に近づけるかを競う。重度脳性まひや四肢に重い機能障害がある障害者のためにヨーロッパで考案され、パラリンピックでは1998

8年のソウル大会で正式種目に採用。日本は2008年北京大会から出場し、リオ大会では銀メダルを獲得した。障害の種類や程度でクラス分けされ、自力での投球が困難な選手はすべり台の形をした投球補助具(ランプ)などを使うこともできる。

される。体力勝負ではなく、障害の有無にかかわらず楽しめるのだという。企業対抗戦に出場した飲料メーカー伊藤園の男性社員(26)も「やるのは2回目だったが、頭も使う。手軽にできるし、会社の忘年会でやったら盛り上がると思う」と話す。

こうしたポッチャ親睦の広がりに対して、協会普及振興部の担当者は「協会が関与しないところでも大会や体験会が増え、認知度が上がってきた」と受け止める。その上で、東京大会に向けて「満員の有明体育競技場でのメダル獲得が目標だが、多くの人がポッチャを知り、2020年以降も機運が継続してくれば」と期待している。

